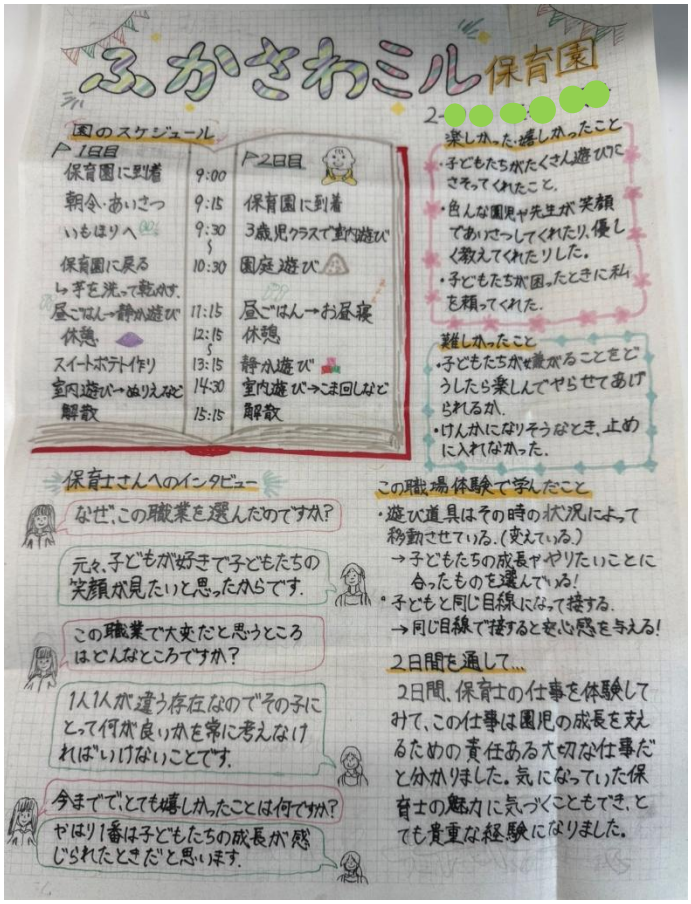
情熱　～職場体験の中学生から教えていただいたこと～

●ふかさわミル保育園では、キャリア教育の一環で中高生の職場体験を随時受け入れています。今年度は既に都立桜修館中等教育学校、東深沢中学校にお通いの中学2年生が保育士の仕事を体験するために訪問してくれました。また今月は深沢中学校の中学生 2 名の職場体験が予定されています。

●先日、その職場体験を終えた桜修館中等教育学校の中学生お二人から体験レポートとお礼のお手紙を戴いたのですが、内容の素晴らしさに思わず唸ってしまいました。折角ですので今月はお二人のレポートを紹介させていただきます。

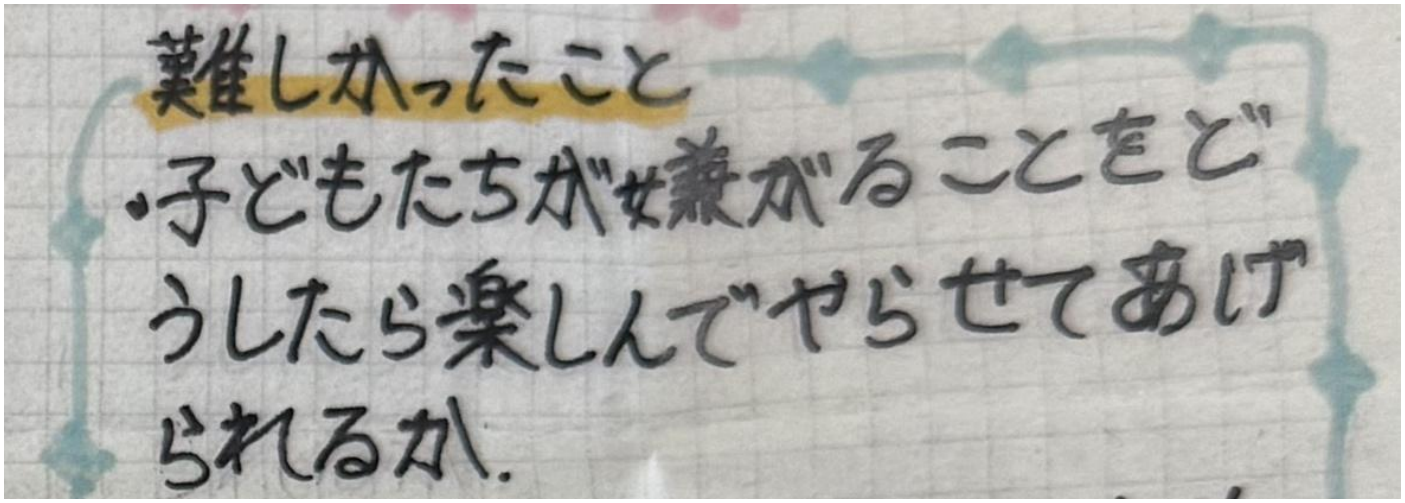
●さっそくお一人目、S さんのレポートです。

内容は「園のスケジュール」「保育士へのインタビュー」「楽しかった・嬉しかった事」「難しかった事」「この職場体験で学んだこと」が A4 のレポート用紙 1 枚にコンパクトにまとめられています。イラストを交えながら非常にかわいらしく、かつ分かりやすく保育園の仕事内容を説明してくださっているのですが、驚くべきはその吸収力と反応力の高さです。これはこの後紹介する Y さんも同じです。



以下いくつか掘り下げていきたいと思います。

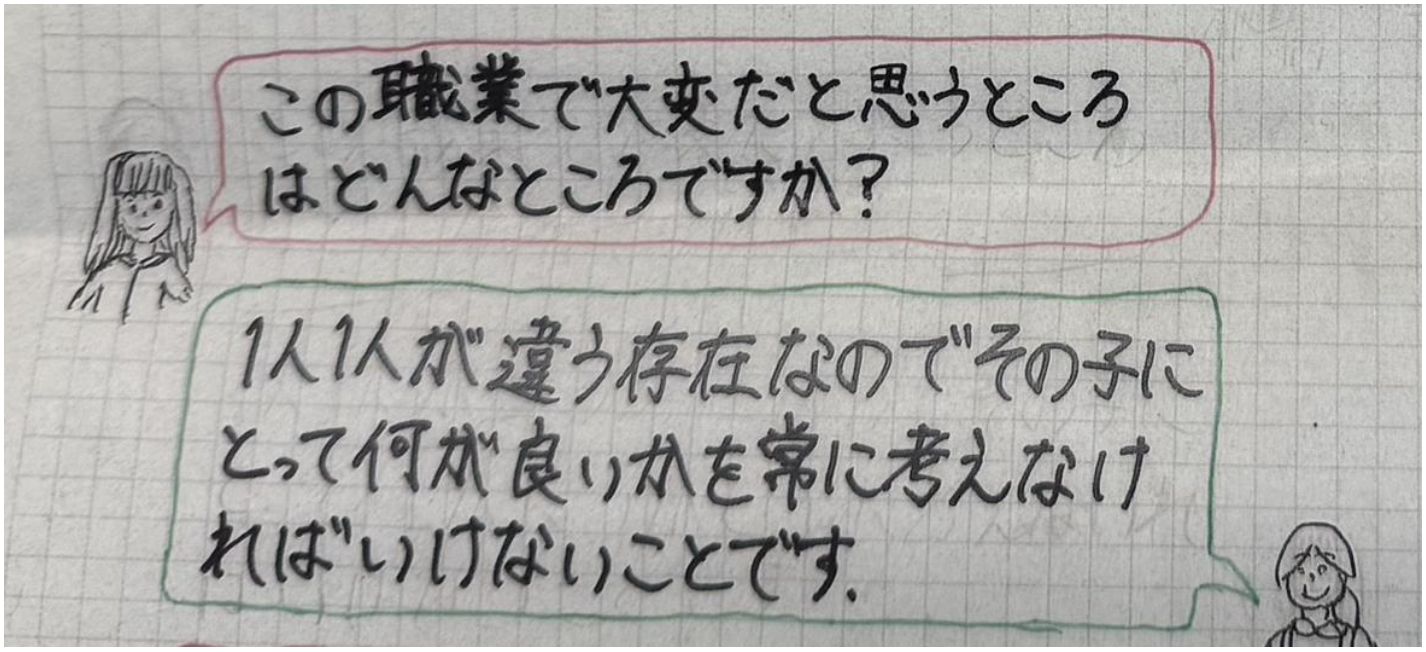
●保育をしていて難しかったこと



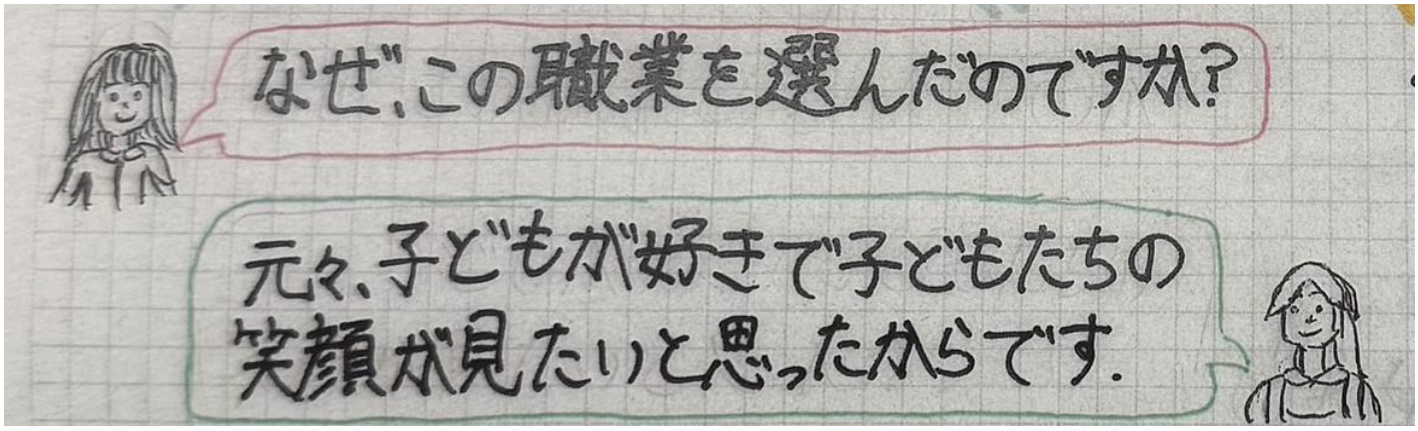
Sさんは、保育士の仕事を体験する中で特に「子どもたちが嫌がることをどうしたら楽しんでやらせてあげられるか」が難しかったといいます。まず、「やらせることができるか」ではなく「やらせてあげられるか」という表現に、Sさんの優しさが感じられますね。その上で、着替えや片付けなど、活動の切り替えのタイミングでの関わり方における S さんの戸惑いが伝わってきます。目の前の子どもに、それまで熱中していた活動や遊びから、着替えや食事等、次の活動に主体的に向かってもらうためには、次の楽しい見通しを子どもに見せてあげることが必要ですが、初めからすぐにそれが実践できたら苦労はありません。でも、私がSさんをすごいなと感じたのは、子どもが嫌がることをただ「やらせないといけない」と思うのではなく「楽しんでやってほしい」と思ってくれたところです。どうしてSさんはそのように考えたのでしょうか。

●答えは保育士へのインタビューの中に

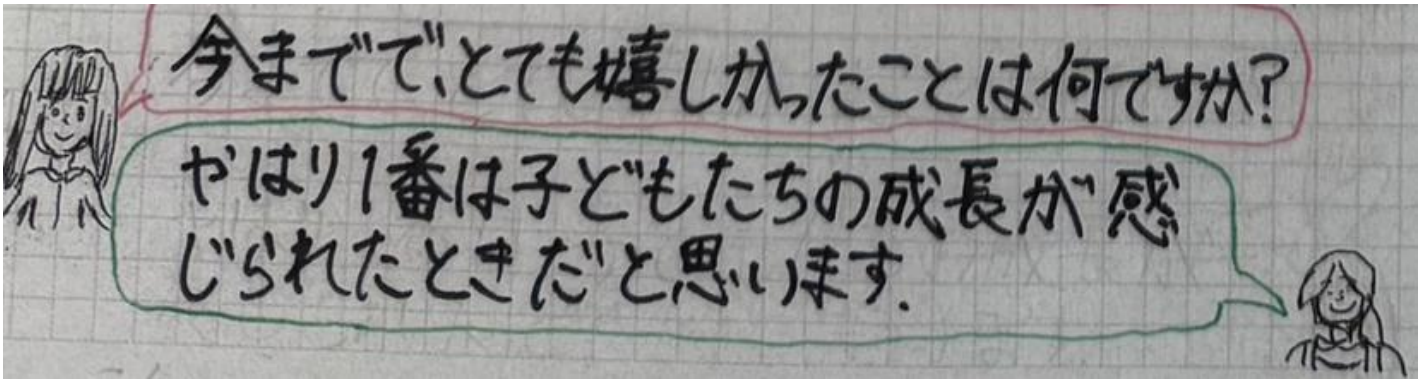
その答えはSさんが行ったインタビューの中にありました。



「保育士の仕事の大変さは？」という S さんからの問いかけに対し、ミルの保育士はふかさわミルの保育理念である「**一人ひとりを大切にする保育**」を自分なりの言葉で説明したことが伺われます。インタビューは続きます。



この「元々この職業を選んだ理由が、一人ひとりの**子どもの笑顔が見たい**という動機から始まっている」という保育士の回答から、そうであれば目の前の子どもを楽しませてあげたいと思うのは当然、という風に S さんの中で肚落ちしたことが伝わってきます。そして――

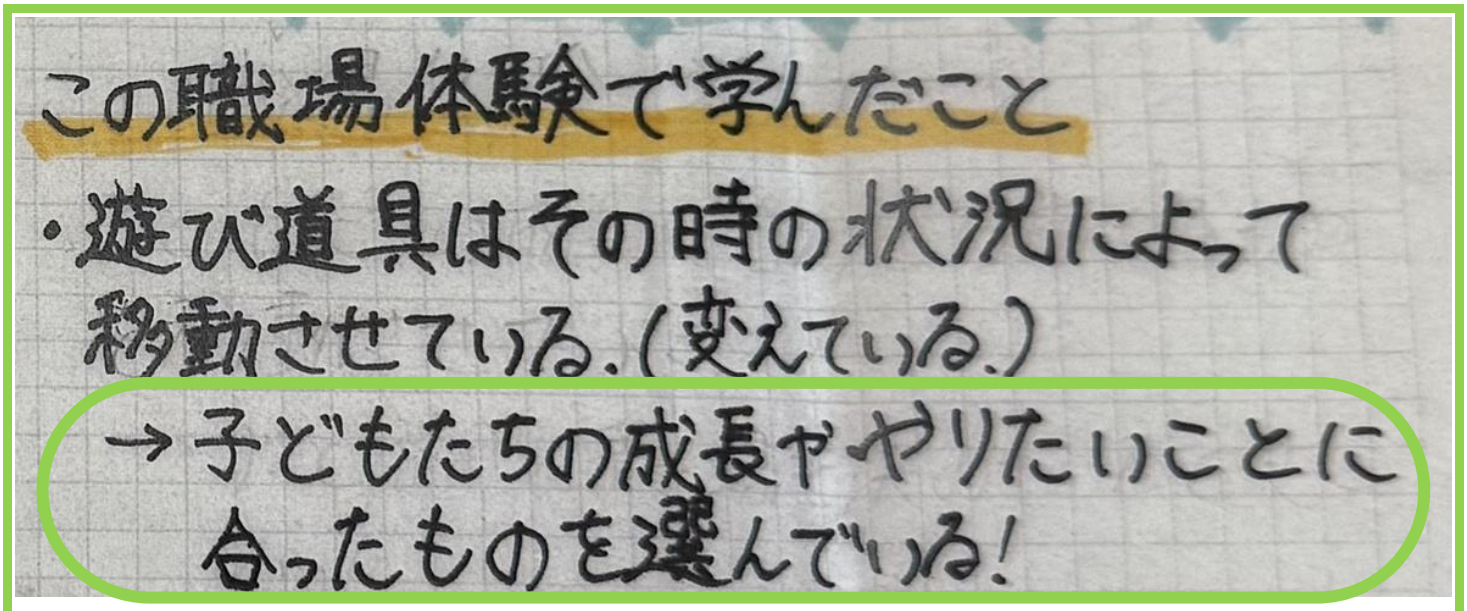


インタビューを通じて、Sさんは保育士の仕事の魅力を「子どもをただ楽しませるだけでなく、その楽しさが子どもの成長に繋がったことを実感できる」点に見出しています。すなわち、「**一人ひとり違う存在の子どもにとって良いこと、楽しいことを常に考えるのは非常に難しいが、その先にある子どもの成長や子どもの笑顔を思えば、それはやりがいになる**」ということをSさんは理解してくれていたのです。

このやりとりは、私にとって非常に感動的でした。職員の誰がインタビューに答えてくれたかは分かりませんが、私が思う保育の仕事の魅力を存分に伝え、Sさんの共感を得ているからです。私は読んでいて胸が熱くなりました。

●子どもの成長に必要不可欠な「興味と発達」

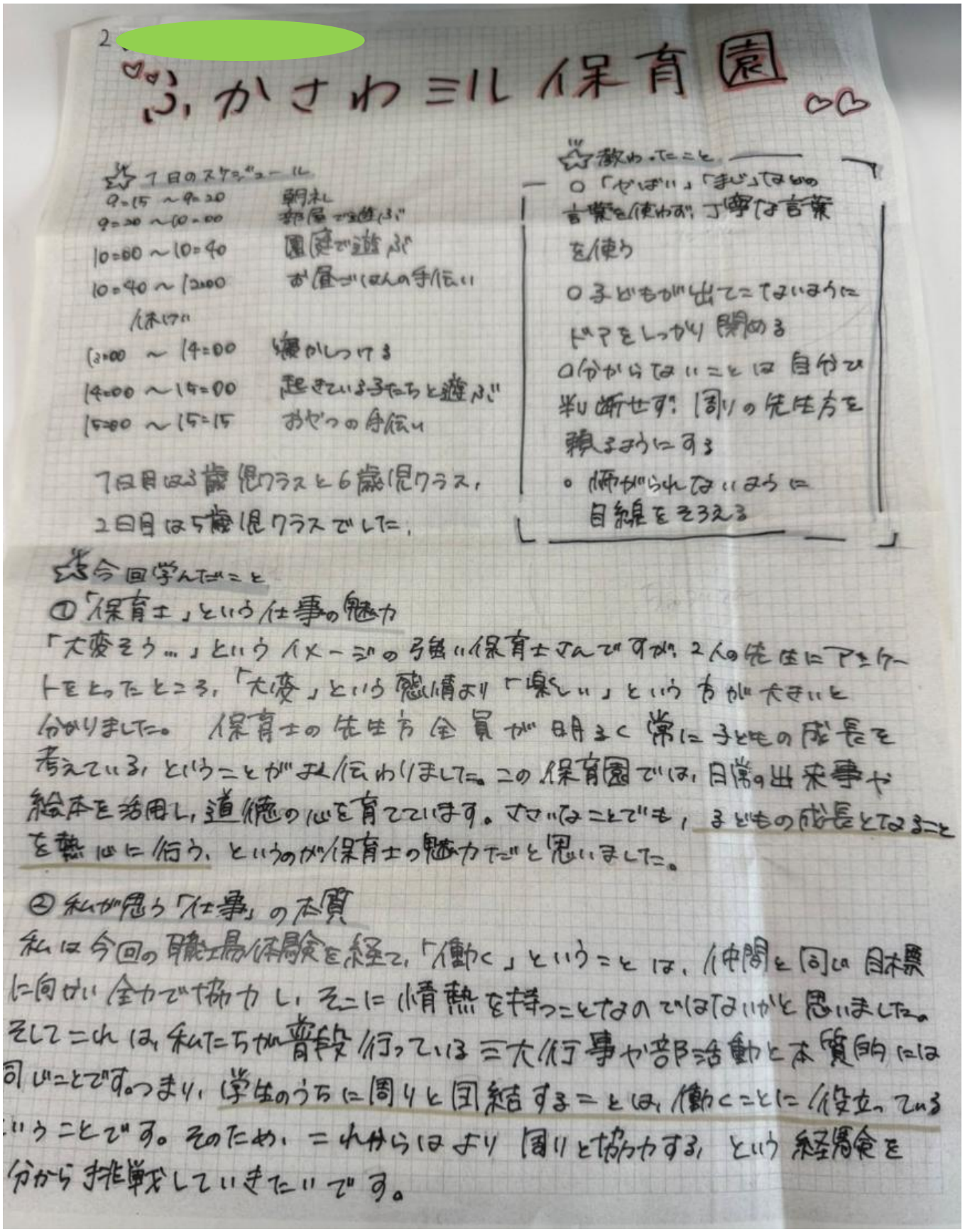
Sさんのレポートでもう一つ驚いたことがありました。それは保育環境の設定について、ミル保育園が大切にしている環境設定のポイントを、次のとおり見事に見抜いている点です。



保育環境を子どもが存分に遊び込めるものにするためには、子どもの興味と同時に発達にも合っていることが必要であると、これまで何度かおたより等でもお伝えしていますが、Sさんはそのことをたった2日間の職場体験で掴んでいます。私が事前にレクチャーしたわけではありません。主任もしてないそうです。とすると、担任が実際の保育環境を見せながら熱量を持ってそう説明したに違いありません。そして、そのことが S さんの共感と納得感を生んだことが、レポートの中のエクスクラメーションマーク(！)からも伝わってきます。

●私はその光景を想像して非常に嬉しくなりました。何も私が一所懸命熱弁を振るわなくとも、先生たちは自分たちが大切にしている保育の考えを雄弁に語ってくれている。そう感じられたからです。そこに園長がいなくても、園の理念が保育園を動かしている。これほど頼もしいことはありません。

●次にご紹介するのは Y さんのレポートです。Y さんのレポートもまた、S さんとは異なる視点で素晴らしいものでした。



2 [redacted]

ふかさわミル保育園

☆1日のスケジュール

9:15 ～ 9:20	朝礼
9:20 ～ 10:00	部屋で遊ぶ
10:00 ～ 10:40	園庭で遊ぶ
10:40 ～ 12:00	お昼ごはんの手伝い
休憩	
13:00 ～ 14:00	寝かしつける
14:00 ～ 14:00	起きている子たちと遊ぶ
15:00 ～ 15:15	おやつの手伝い

7日目は3歳児クラスと6歳児クラス，
2日目は5歳児クラスでした．

☆教わったこと
- 「やばい」「まじ」などの言葉を使わず丁寧な言葉を使う
- 子どもが出てこないようにドアをしっかり閉める
- 分からないことは自分で判断せず周りの先生方を頼るようにする
- 怖がられないように目線をそろえる

☆今回学んだこと

①「保育士」という仕事の魅力

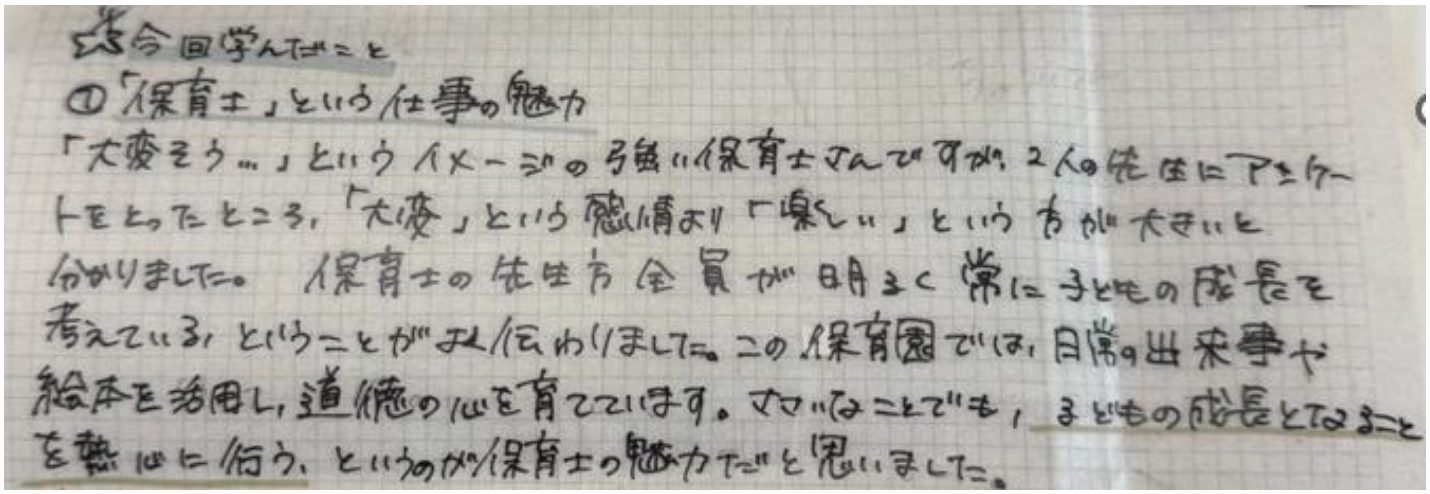
「大変そう…」というイメージの強い保育士さんですが，2人の先生にアンケートをとったところ，「大変」という感情より「楽しい」という方が大きいと分かりました。保育士の先生方全員が明るく常に子どもの成長を考えている，ということがよく伝わりました。この保育園では，日常の出来事や絵本を活用し，道徳の心を育てています。ささいなことでも，子どもの成長となることを熱心に行う，というのが保育士の魅力だと思いました。

②私が思う「仕事」の本質

私は今回の職業体験を経て，「働く」ということは，仲間と同じ目標に向け全力で協力し，そこに情熱を持つことなのではないかと思いました。そしてこれは，私たちが普段行っている三大行事や部活動と本質的には同じことです。つまり，学生のうちに周りと団結することは，働くことに役立っているということです。そのため，これからはより周りと協力する，という経験を自分から挑戦していきたいです。

●先生方全員が明るく…

Y さんはまず、2 日間の職場体験を通じて「保育士の先生方全員が明るく常に子供の成長を考えている、ということが伝わりました」と書いてくれました。


今回学んだこと
①「保育士」という仕事の魅力
「大変そう…」というイメージの強い保育士さんですが、2人の先生にアンケートをとったところ、「大変」という感情より「楽しい」という方が大きいと分かりました。保育士の先生方全員が明るく常に子どもの成長を考えている、ということが伝わりました。この保育園では、日常の出来事や絵本を活用し、道徳の心を育てています。ささいなことでも、子どもの成長となることを熱心に行う、というのが保育士の魅力だと思いました。

「先生方全員」「明るく」という所に私は嬉しくなりました。まず何を差し置いても保育園は安心できて明るい雰囲気に包まれていなければならないと常々思っているからです。

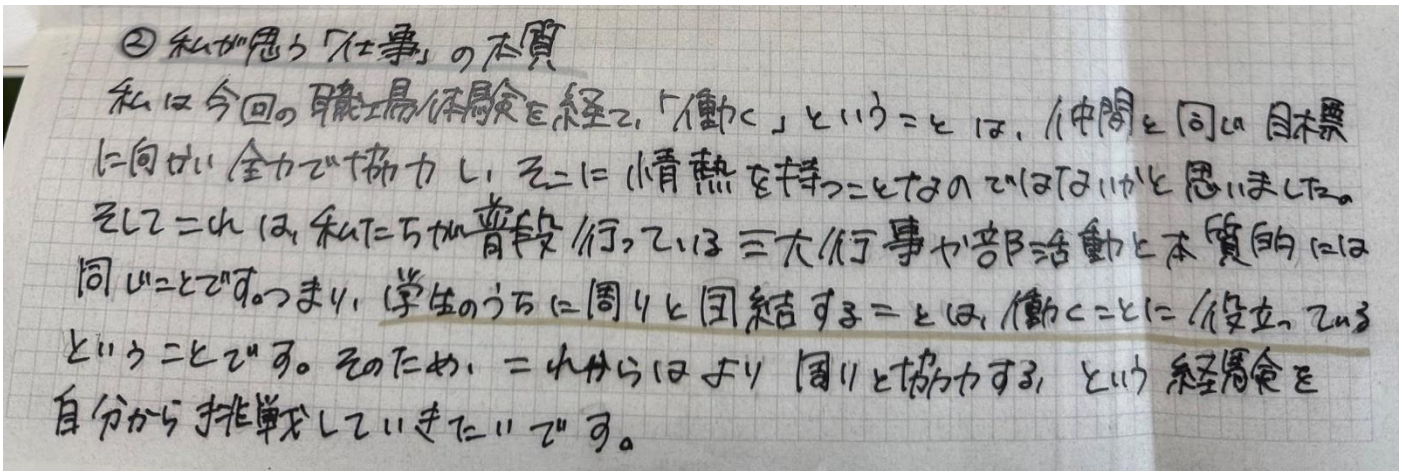
●凡事徹底

そして「ささいなことでも、子どもの成長となることを熱心に行うというのが、保育士の魅力だと思いました」と Y さんは言います。まさに以前コラムで引用した鍵山秀三郎さんの「凡事徹底」をご存知かのような、はっとさせられるような本質を突く視点に感動しました。最近はさすがに「保育士なんて、ただ子どもと遊んでいるだけの仕事でしょ？」といった偏見を耳にしなくなりましたが、一見地味で生産性がないように見えることに確固たるねらいを持ち、繰り返し繰り返し

行うことの大変さ、その熱量に気づいてもらえたミルの保育士たちの歓喜と安堵の声が聞こえてきそうです。

●情熱を持つということ

さきほどＹさんから「熱心」という言葉が出てきましたが、熱量については他のところでも書いてくださっています。


②私が思う「仕事」の本質
私は今回の職場体験を経て、「働く」ということは、仲間と同じ目標に向かい全力で協力し、そこに情熱を持つことなのではないかと思いました。そしてこれは、私たちが普段行っている三大行事や部活動と本質的には同じことです。つまり、学生のうちに周りと団結することは、働くことに役立っているということです。そのため、これからはより周りと協力する、という経験を自分から挑戦していきたいです。

「私は今回の職場体験を経て、『働く』ということは、仲間と同じ目標に向かい全力で協力し、そこに情熱を持つことなのではないかと思いました。」

●私は、このＹさんの情熱的で若々しい感性に感動を覚えるとともに、Ｙ さんにそのような感想を抱かせたミルの先生方のチームワークと仕事に向き合う姿勢に対し頭が下がる思いがしました。

●このことから、平安時代初期に天台宗を開いた最澄が残した次のような言葉を思い出しました。

「古人言く、径寸十枚、これ国宝に非ず。一隅を照す、これ即ち国宝なり、と」（最澄「天台法華宗年分学生式」）

（訳）むかし、魏王が言った。「私の国には直径一寸の玉が十枚あって、車の前後を照らす。これが国の宝だ」。すると斉王が答えた。「私の国にはそんな玉はない。だが、それぞれの一隅をしっかり守っている人材がいる。それぞれが自分の守る一隅を照らせば、車の前後どころか、千里を照らす。これこそ国の宝だ」と。

●前回のコラムの最後に引用した安岡正篤氏の「**一燈照隅**」の語源となったエピソードです。ミルの保育士たちの多くは 20 代・30 代の若者です。彼等の若き情熱が多感な中学生の探求心・感性に触れ、火花を起こし、お互い何かを与え合う――その尊い瞬間に立ち会えたような気がしました。彼等のような一隅を守る若き力が、仕事や自身の育児を通じて次世代の日本を創っていきます。これを国の宝と呼ばずにはいられません。そしてこのレポートを送ってくださった都立桜修館中等教育学校の S さん・Y さんと先生方に厚く感謝申し上げます。

「人に大切なものは知識よりも才能よりも何よりも真剣味であり、純潔な情熱である」　（安岡正篤）

園長　橋本　英明